

塚崎幹夫著

星の王子さまの世界

読み方くらべへの招待



中公新書

638



中公新書 638

塚崎幹夫著

星の王子さまの世界

読み方くらべへの招待

中央公論社刊

塚崎幹夫 (つかさき・みきお)

1930年(昭和5年)神戸市に生れる。

1953年、京都大学文学部文学科卒(フランス文学専攻)。高校教師、バス車体製造会社勤務を経て、現在、富山大学教授(教養部で「文学」を担当)。

著書『やってやるかやられるか——現代に生きる』(池田書店)

『教育の機会均等とは』(共著)(三一新書)

訳書 ロジェ・カイヨワ『文学の思い上り』(共訳)(中央公論社)

ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』(共訳)(講談社文庫)

ロジェ・カイヨワ『蝟』(中央公論社)

ロジェ・カイヨワ『反対称』(思索社)

ロジェ・カイヨワ『イメージと人間』(思索社)

星の王子さまの世界

中公新書 638

© 1982年

検印廃止

昭和57年 1 月15日印刷

昭和57年 1 月25日発行

著 者 塚 崎 幹 夫

発行者 高 梨 茂

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替東京 2-34

定価 400円

プロローグ

「『星の王子さま』に会う」と『星の王子さま』を楽しむ」は、それぞれ独立した別個の論文である。執筆時期が違っただけでなく、視点も構成も異なる。

遊覧客でにぎわっているすそ野はなだらかだが、一歩分けて入ると、『星の王子さま』は険しい谷が重なりあう奥の深い複雑な山塊である。『星の王子さま』に会う」は、骨の折れるこの登頂の記録であり、『星の王子さま』を楽しむ」は、たどり着いた山頂からのくつろいだ展望といえる。たとえば、前者では節の区切りが一定でないが、岩場や谷の起伏の同じでないことによるのであり、後者では全体が整っているが、目でたどる峰の線は端麗だからである。

同じ対象を扱いながら、重複する部分はほとんどない。だからといって、つないで一つにまとめるわけにはいかなかったのは、このゆえにある。

目次

プロローグ i

『星の王子さま』に会う 3

はじめに 4 テキストについて 6 模索のあ

と 10 三本のバオバブについて 13 六つの星

めぐり 17 献辞について 24 ウワバミとゾウ

30 「年取ったのがいけなかった」 33 王子と

飛行士 39 模範を見る 40 死の決意で結ばれ

る 49 かぐや姫との違い 52 ウェルトへのひ

そかな別れ 54 祈りの書としての『星の王子さ

ま』 60 「愛することを知らなかった」の一解釈

61 サン＝テグジュペリのはしやぎ 71 バラ

の花の四つのトゲ 74 あとにはひかない王子 78

サン＝テグジュペリの死 82 サン＝テグジュペ

リと愛国心 84

『星の王子さま』を楽しむ 85

夢か幻か現実か 86 孤独 95 へんな大人たち

104 大切なもの 113 責任 120 心 128 別れ 135

読み方くらべへの招待 143

エピソード 157

読書でばかになる危険 157 問いかける読書 159

考え方くらべ 162 作者の意図は作品にまさる 165

読み方くらべ——作品を鏡にして自分を見る 166

参考資料 169

他の作品による『星の王子さま』注解 172 サン

II テグジュペリ年譜 191

あとがき 195

星の王子さまの世界

凡例

『星の王子さま』のテキストには内藤濯訳『星の王子さま——プチ・フランス』岩波書店・一九五三年（岩波少年文庫二〇二〇）日本語版を使用した。引用箇所の指示もこれによる。アラビア数字でそのページを示した。

引用文中の「」は著者による補注、省略を示す。

『星の王子さま』に会う



バオバブの木（岩波本対32ページ，本書一三～一六ページ参照）

はじめに

四十歳近くになってはじめて、サン・テグジュペリの『星の王子さま』を読んだ。

受け持っている初歩のフランス語のクラスの教科書として、目先きを変えるために、この書物をたまたま選んだことよってである。それは、一生のあいだでもめったにめぐりあうことがないと思われるほどの、最も感動的な書物の一冊であった。七年前になる。

フランス文学にかかわるものでありながら、この高名な書物をそれまで一度も手にとってみたことがなかったのは、一種の食わず嫌いによる。一般にいわれているような内容のものだとして、まったくくだらぬと思い込んでいたからであった。薄っぺらい、それも「子供向け」に書かれた書物である。読み方にそんな大きな違いが生じうるとは考えてはいなかった。

しかし、私はいまこの書物を、現下の世界の危機にどこまでも責任を感じて思いつめる一人の「大人」の、苦悩に満ちた懺悔ざんげと贖罪しよくざいの書であると受け取っている。他方、人びとのいつているところから判断すると、彼らはこの書物を逃避か、免罪か、ナルシズムの書物と、どうやら理解しているらしく思われるのである。

「童心教」とでも名づけるべき信仰が、怠惰な精神と共謀して、あえていわせていただくならば、作品そっちのけのこのいい気な読み方をはびこらせているように見える。実際、「童心」という、

あいまいで神聖なことばを恭しく唱えておきさえすれば、あらたかな偶像『星の王子さま』から、手に入れることができない承認と免罪符はない、というかのようなくあいにことが運ばれている。戦う操縦士としてかねて覚悟のうえとはいいながら、思わず死から顔をそむけたとき、著者の脳裏を横切ったのは、子供のころの楽しかった日々の思い出であった、という神話がまずつくられる。勇ましいだけがとりえではない、この人間味あふれる著者のイメージはわれわれの胸をつく。子供のころのことをいつまでも忘れない「童心」こそ、むしろ彼の勇気を支えていたものかもしれないという、まことしやかな考察が引き出される。

「童心」は味気ない人生の糧ともなるものだ。かくて、このいかなる逃避をも許さないと私には見える書物が、戦わず飽きているだけのものにまで、「童心」を惜しむためなら、さらにいつそう現実から目をそらせてもよいかのような口実を与えるものとなる。

汚れない「童心」をもちつづけていた著者は、人びとの心のなかに生き残っている「童心」に訴えることを期待して、この書物を書いたのだという説明も同様に好評を得ている。この場合、重点はもっぱらわれわれに残っている「童心」というところに移される。この手続きによって、厚顔な錯覚にすぎなくても、「童心」が残っていると申し立てることができるかぎり、だれでも容易に自分を著者のがわに置くことができることになるからである。ほかならぬ本人が告発されているのだが、他のものに罪を負わせることさえできるようになるのである。

この書物に無邪氣に感動したふりを装う^{よそ}だけで、心で見なければ見えないという肝心かなめのものを、自分だけは読みとりえたような気分にもなれるのだからこたえられない。著者の希望を無視してこの書物を寝そべって読み、したがって、著者が一所懸命に描いたという三本のバオバブ（三ページ扉絵）や、ウワバミにこなされているゾウの絵（二ページの第一号、第二号の絵）が何を表わしているのかなど、この作品を解くかぎが秘められていると私には思われるほのめかしの意味が、何もわからなくても平気である。この作品の生命である詩的雰囲気^{雰囲気}を、そのようなせんさくはかえって損なうと、繰り返し唱えてさえおればよいのだからである。

テキストについて

原文を読んだか翻訳を読んだかで解釈が違った、という疑いをもつ人もいるかもしれない。しかし、日本語版の内藤濯^{あつ}氏の訳は、数か所納得のいかないところもあるが、望みうる最高の名訳であると思言できると思う。

納得がいけないといっても、全体の理解に重大な影響を及ぼすようなものではけっしてない。参考までに、任意にそのうちの二か所を取り出して示しておく。

キツネと王子が出会って、キツネが王子に何をさがしているのかと問う。人間をさがしているのだと王子は答える。これをうけたキツネのことばが内藤訳では次のようになっている。

「人間ってやつあ、鉄砲もってて、狩をするんだから、おれたち、まったく手も足もでないよ。ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかには、人間ってやつにゃ、趣味がないときてるんだ。あんだ、ニワトリさがしてるのかい」(106-107)

私は次のように読んだほうがより適当ではないかと思っている。「」のなかは私が想像するキツネの心のなかでの自問自答である。

「人間ってやつあ、鉄砲もっていて、狩をする。まったくいやなやつらだよ。「あんないやなやつらに何の用があるのだろうか」やつらはニワトリを飼ってもある。これが人間ってやつのだ一つのとりえさ。「ああ、わかった」あんだ、ニワトリさがしてるのかい」

王子と飛行士の別れの日の夜が始まった場面で、王子が飛行士に「ぼくも、きょう、うちに帰るよ」と打ち明ける。それから、悲しそうに、「でも、きみんとこより、もっともっと遠いところなんだ……もっともっとほねがおれるんだ」とつぶやく。このときの王子の様子を、内藤訳は次のように説明している。

「王子さまは、遠いところで迷子にでもなったように、きつとした目をしていました」(140)

私は次のような訳でよいのではないかと思っている。

「王子さまは、はるか遠くのほうをばくぜんと、しかしきつとした目をして見つめていました」

少なくとも以下に述べる私の見解は、原文に基づいて批判してください。日本語訳によって反論してください。いっこうにさしつかえないと考えている。

私自身、はじめはフランス語の時間で扱っていたが、数年前からは別に受け持っている文学の授業（毎週原則として一冊ずつ、一年に約二〇冊の文庫本の主として外国の小説と戯曲の「読み方くらべ」を、学生たちと楽しんでいる）のほうに移し、そこでは内藤訳の『星の王子さま』をテキストとして使っている。支離滅裂のこまぎれの逐語訳の拷問に、愛する王子をあわせつづけることに耐えられなくなったからである。ここでの引用も、読者の照合の便を考えて内藤氏の訳を使わせていただく。

そもそも原文、原文というが、原文がそう簡単にだれにでも味わえるわけではない。原文を読んでいるといっても、日本語に一度もどして理解している場合は、多かれ少なかれまずい日本語訳を読んでいるのと変わらない。たどたどしく原文を読むよりは、信頼のおける翻訳を読むほうがはるかに作品の中心に近づきうるといえる。たとえば、九〇パーセントの忠実度の翻訳を八〇パーセントの日本語の読解力で読むとすれば、七二パーセントの滋味は味わうことができることになる。これに反して、二〇パーセントか三〇パーセントの原文の読解力では、みじめなかすしかすくいとれない。原文にこだわる必要はない。

著者が伝えようとしていたことは、ことばに置きかえられたとき、すでに原語の段階でもとも

といくらかは損なわれているのである。翻訳によって、たしかにさらに多くが失われる。もう一度数字を利用して説明すると、すぐれた作家が九五パーセントの感度で表現したことを、すぐれた翻訳者が九〇パーセントの忠実度で他の言語に移しえたとすれば、なお八五・五パーセントの内容を保っていることになる。他方、六〇パーセントとか七〇パーセントの表現にしか成功していない作品はいくらでもある。すべて相対的なものである。

読者の想像力の協力がなければ、どんな作品でも、表現されたことだけで人を動かすことはできないということである。読みとったことを、想像力を働かせて補って、一〇〇パーセントにも一二〇パーセントにも復元させる努力が読者に要請されている。この読者の義務が強調されることが最近では少なくなっているので、すぐれた作品というのは、読者がかたくなに眠っていても、作品のほうから起こしに来るものであるかのような誤解が生じているのは残念である。いいまわしが多少不完全でも、読者に想像力があれば、作品が十分に生きることがある。これこそ一種の「心で見る」ということであろう。ひどい翻訳はひどい原文と同じようにどうしようもないが、すぐれた翻訳がある場合、それでもなお作家の導こうとしている世界に入れないとしたら、読者が悪いといわねばならない。

『星の王子さま』の読み方が問われるとき、翻訳で読んだということは、ここではいいわけにならないことをあらかじめ確認しておきたい。

模索のあと

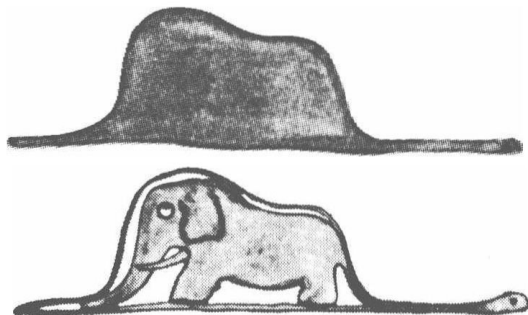
毎年一〇回は読んでいるから、もう七〇回以上は読んだことになる。授業のまえに七、八回読みなおす。授業のあとさらに二、三度読み返す。毎年少しずつの発見があった。

一年目は、六つの星めぐりの話を、詩的なイメージによる単なる気のきいた風刺として読み流してしまった。体裁だけを繕う王さまの無力さ、うぬぼれ男の浅ましき、呑み助の堂々めぐりの論理、実業屋の実業の中身の実のなさ、点燈夫本人は一所懸命だが時代に合わなくなった仕事の無意味さ、学者たちのいい気な傍観者の無責任さ、これらを手あたりしだいに暴いたものだと思えば、盛った器の見事さには感嘆のほかないが、内容そのものはそれほど新味のあるものとはいえない。

しかし、三年目くらいから、うぬぼれ男を皮肉ったサン・テグジュペリ自身が、ただ人を感じさせて自己満足するためだけに、これらの話を持ち出して並べたということは、ありえないと思うようになった。おかしさにとどまらぬ深い怒りのようなものが、秘められているのを感じるようになった。

また、最初のエピソードに出てくるウワバミのなかのゾウの話は、一般に信じられているような、単にももの裏面という程度の比喩としては、あまりにどぎつすぎ大げさすぎる。ジャングル

『星の王子さま』に会う



上が第一号の絵、下が第二号の絵（岩波本8～9ページ、本書一〇～一三ページ参照）

での話だとしても、ゾウがのまれているというのはわざとらしい。そういうとつびな空想にふけるところに子供の子供たる所以^{ゆえん}がある、というようなことをいって片づけることは簡単である。しかし、直感的にどうもひっかかる。ウワバミそのものについての説明もひじょうに意味ありげである。

「ウワバミというものは、そのえじきをかまずに、まるごと、ペロリとのみこむ。すると、もう動けなくなつて、半年のあいだ、ねむっているが、そのあいだに、のみこんだけものが、腹のなかでこなれるのである」（7）

自分の不明を告白するが、六年目によく、ウワバミのなかのゾウも大切だが、ウワバミにまさにのみこまれようとしている野獣の絵にも、意味があるのではないかとふと思いついた。原始林のことを書いた本のなかのこの「すばらしい絵」を見て、六歳の子供であつた飛行士が強い印象をうけたということになっている。なぜ強い印象をうけたのか。特別豪華なきれいな絵で、罪のない野獣がウワバミにのみこまれる残酷さが、いっそう真に迫つたものになつていたからであつた。「すばらしい絵」で楽しかつ